豊かに生きる
誌上セミナー

HUMAN HUMAN

▶スポーツボランティアのススメ③

スポーツボランティアのススメ最終回。391号では、ボランティアの定義と魅力である楽しさについて。392号では東京2020大会のボランティア概要についてご紹介しています。

※この原稿は2019年8月27日に取材したものです

公益財団法人笹川スポーツ財団特別研究員
東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会ボランティア検討委員
西川千春 氏

Profile
慶應義塾大学法学部法律学科卒業。米国アリゾナ州立大学サンダーバード国際経営大学院国際経営学修士修了(MBA)。1990年に日本精工(NSK)駐在員として渡英。2005年に海外事業をサポートする経営コンサルタントとして独立・起業。2012年ロンドン五輪に言語サービスボランティアとして参加したのをきっかけに、2014年ソチ大会、2016年リオ大会にもボランティア参加。経験を基にボランティアの楽しさややりがい、さらには日本社会への提言をテーマに政府、自治体、大学、関係団体、企業への講演・アドバイザリー活動を積極的に展開。著書に「東京オリンピックのボランティアになりたい人が読む本」(イカロス出版)。

ボランティアの活躍が大会の成功を左右する

オリンピックやパラリンピックの運営において、ボランティアは重要な役割を果たしています。ボランティアの活躍が大会の成功を左右すると言えるほど。世界中から人が集まり注目される大会だけに、ボランティアを務める人の中には「どんな心構えで臨めばよいのだろうか」「言葉が通じるだろうか」「自分に務まるだろうか」などと不安を感じている人も多いのではないでしょうか。ボランティアの心得を学びましょう。

ボランティアに英語力は不可欠?

東京2020大会には、様々な国籍、性別、年齢、職業の人たちが公式ボランティアとして参加します。中には、プロ並みのスポーツ経験者や、ネイティブのように外国語を話せる人、医師や看護師など専門的な資格を持っている人、メディアで働いたことがある人などもいます。自分の能力や経験は存分に発揮してほしいと考えています。ただ勘違いしてほしくないのは、大企業の社長であろうが、学生だろうが関係ない、みんな同じボランティアだということ。社会的なものを持ち込んではいけません。若い子だって自分の親くらいの年齢の人を助けてあげられるし、ボランティア同士が刺激し合って意欲を高めることもできる。そういった素晴らしさがあります。

また、「自分にはボランティアで活かせるほどの能力や経験がない」などと悩むことはありません。例えば英語。日本人は英語ができないと思い込んでいる人が多いですが、実は義務教育の中でかなりの英語を勉強しています。ただ普段は話す機会が少ないし、完璧主義な人が多いので、外国人が目の前にいても失敗するのが怖くてなかなか話しかけられないんですね。大会ボランティアには通訳など高度な英語力を必要とする分野もありますが、道案内などのちょっとしたことは、拙い英語でも通じるものです。そういったシーンを重ねると、英語が話せるようになっていく。最近は機械翻訳などの技術も追いついてきましたが、オリンピック・パラリンピックは公式ボランティアに限らず様々な場面で外国人と人間同士のコミュニケーションを深めるよい機会だと思います。

堅苦しく考えず、ボランティアを始めてみる

ボランティアをやりたいと思っていても、「仕事や家庭があるので短期間しか手伝うことができない。かえって迷惑がかかるのでは」「体調を崩して続けられなくなったらどうしよう」などと、先回りして心配する人もいます。抱えている事情は人それぞれ。ボランティアは仕事ではなく自由意志で行うものですから、何らかの事情で続けられなくなったとしても、運営側は無理強いすることはありません。それも織り込み済みで事前準備をしますから、運営に支障をきたすこともありません。短時間だったとしてもやむなく続けられなくなったとしても、自分の時間や能力を公共のために差し出すのは素晴らしいこと。ある程度の責任感は必要ですが、日本人は自分の時間に対する価値を低く考えすぎです。

運営側もボランティアに感謝し尊敬を持って接しますし、みんなで大会を盛り上げようという雰囲気も生まれて、ボランティアは周りの人やチームのために一生懸命やってくれるようになる。責任感はボランティア活動をしていくうちに自然と芽生えてくるものなのです。あとはとにかく楽しんでやること。心から楽しんでボランティアをしている姿は大会の雰囲気に大きく影響します。

困っている外国人に声をかけて

東京2020大会の公式ボランティアの募集はすでに締め切っていますが、オリパラ関連のイベントやホストタウンのボランティアなど、これから応募できるものがたくさんあります。各自治体や団体に問い合わせる方法もありますが、日本財団のボランティアサポートセンターがボランティア情報を発信していますし、希望する人に紹介できるような仕組みを作っています。短い期間だけできるものもありますから、やりたい気持ちがあるならできる範囲で第一歩を踏み出してみましょう。

また、ボランティアという形式に関係なく、海外から来た人が困っているのを見たら、思い切って「May I help you?」と声をかけてみてください。海外旅行では、現地で親切にしてもらったことはすごく良く覚えているもの。それだけでも日本や日本人の印象は良くなります。

さらに大事なのは継続性です。オリンピック・パラリンピックでは、様々な人が開催国を訪れます。それはそれで素晴らしいことですが、ゲストとして迎えて表面上だけで終わってしまうのではなくて、その次の段階に行く。多様性を受け入れ、コミュニケーションを続けていこうという意識が重要になってくると思っています。

協力／公益財団法人笹川スポーツ財団　https://www.ssf.or.jp/